

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

マスターブロの死  
(変わるネパールと変わらぬネパール：  
グローバル化した世界に暮らす, 第4回)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード: 作成者: 南, 真木人 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5112">http://hdl.handle.net/10502/5112</a>



元気な頃のマスタープロ (左から2人目)。吉祥の印として米を額につける。(1992年)

みなみ・まきと 1961年、札幌生まれ。筑波大学大学院修了。専門は文化人類学、南アジア研究。主要共著『エスノ・サイエンス』(京大出版会 2002年)、『文化の生産』(ドメス出版 1999年)、『アジア読本ネパール』(河出書房新社 1997年)など。

## 変わるネパールと変わらぬネパール

### グローバル化した世界に暮らす

第4回

国立民族学博物館助教授  
写真文 南真木人

身内の死ほど辛いことはない。私が調査するマガール人の村で、第二の父親のように尊敬してきたマスタープロ(先生爺さん、以下プロ)が亡くなった。彼の死は、私にそれまでの開発援助観を変えさせるほど衝撃的だった。

一九九八年、久しぶりに訪ねた村には、病にふしたプロがいた。老人によくある前立腺肥大で、手術費が工面できず二か月が経つ。早速、首都カトマンズの大病院に連れて行き、治療することにする。付き添いは四男のテクだ。

辛い手術は成功した。だが、その三日後プロは急死する。それは次のような経緯による。テクは医者から手術後「今晚から食事をあげてよい」と言われたが、それを病棟の看護師に伝えず、食事の再開が一日遅れた。術後二日目、プロに排便がなく、医者から浣腸の指示がでる。テクは浣腸を院外の薬局から買ってきたが、それを机に置き看護師に何も言わなかったため、一日放置された。遅れて行なわれた浣腸後、プロはベッド脇で排便中に気張っていて呼吸困難に陥り、そのまま帰らぬ人となった。テクを責めるわけではないが、私の無念は「便秘で死ぬとは何事か」

### マスタープロの死

であった。だが、この馬鹿らしいほどの悲劇がネパールの現代を象徴している。じつは、治療が後手にまわったのは、テクと看護師の間にコミュニケーションが成り立っていないからだった。首都に住み近代的な知識を身につけた看護師は、テクを要領の得ない「村人」と見下し、逆にテクは看護師の言うことがよくわからず、看護師が自分を馬鹿にしていると不信感を抱いていた。同じネパール語でも、看護師が使う洗練された話法と、「村人」の冗長な話法はかみ合わず、会話にならないのだ。

日本でも、医療関係者と患者の関係は対等とはいいがたく、医者の説明がわからないこともあろう。だが、ネパールのそれはレベルが違う。「村人」と都市住民との間には、不均衡な教育や開発、都市的経験の格差により文化的な断絶があるのである。だとすると、「村」の開発に環境問題など近代の負の側面を勘案している余裕はない。「村」に近代化を物量作戦で投入し、この構造を変えない限り悲劇は続くのだ。プロの死を契機に私は、現金を渡すことを躊躇したり、箱モノ援助に批判的な良心的な NGO の発想は、ナイーブ過ぎるのではないかと考えるようになった。